

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 9 月 4 日現在

機関番号：32601

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26770107

研究課題名(和文) 後期モダニズム文学・文化における越境性ならびに集団性に関する研究

研究課題名(英文) A Study of Border-crossing and Collectivity in Late-Modernist Literature and Culture

研究代表者

秦 邦生 (Shin, Kunio)

青山学院大学・文学部・准教授

研究者番号：00459306

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：この研究課題では、従来の文学史・文化史の修正を目指して、1930年代から50年代のイギリス文学・文化を「後期モダニズム」ならびに「後期帝国主義」の観点から研究した。その具体的な研究対象は、ジョージ・オーウェルのディストピア小説、ディケンズ小説翻案、スパイ小説と映画など、多岐にわたった。この研究課題はこれらの文学・映画テキストを、(1)戦後福祉国家体制の成立、ならびに(2)第二次世界大戦から冷戦へと至る、イギリスをとりまく国際関係の変容、という文脈に置くことで、それらが現実との葛藤のなかで形成されるプロセス、ならびに、社会批判やユートピア的な可能性がそれらの作品に記録される過程を浮き彫りにした。

研究成果の概要(英文)：In this research project, I studied British Literature and Culture of the 1930s, 40s, and 50s in terms of the dual perspectives of Late Modernism and Late British Imperialism. In concrete, this research project focused on a variety of topics such as George Orwell's dystopian novels, David Lean's adaptations of Charles Dickens, and spy fictions (both in novels and films). By contextualizing these literary and filmic texts in the processes of (1) the formation of the postwar Welfare State in Britain, and (2) the transformation of the international situations from the Second World War to the Cold War, this research project shed light not only on the ways these text were created from within the struggles with the social realities, but also on the ways the possibilities of social critique and utopianism were registered in these texts.

研究分野：英文学

キーワード：後期モダニズム 後期帝国主義 ユートピア/ディストピア アダプテーション 小説 映画 福祉国家 冷戦

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、1930年代のイギリス文学を中心に「後期モダニズム」の概念を文学史的に再検討し、それを現代文学の系譜に位置づけることを目的としたものである。

より具体的には、

- (1) 「後期帝国」期のイギリスを中心としたヒト・モノの越境的ネットワークの活発化
- (2) 左右の急進的政治運動の台頭や第二次世界大戦の予兆などの政治的危機に応答する集団性の問題
- (3) 新興マス・メディアの普及を通じた文化的領域の拡大

という三つの文脈に着目し、1920年代に開花した高踏的な実験文学運動としてのモダニズムが、異質な諸要素との相互作用を経ていかに「後期モダニズム」へと変容し、現代ポストコロニアル文学の先駆となったのかを明らかにするものだった。

研究の背景となった「後期モダニズム」という概念は、Tyrus Miller の *Late Modernism: Politics, Fiction, and the Arts Between the World Wars* (1999) が先鞭をつけたものである。Miller はこの概念を、1920年代を頂点とするハイ・モダニズムと、20世紀後半に花開いたポストモダニズムとの「あいだ」に位置する文学・文化動向を記述するために彫琢し、Wyndham Lewis, Djuna Burns, Samuel Beckett などの特に戦間期における文学作品を国境横断的な見地から解読していた。

ただし、狭義のイギリス文学研究において「後期モダニズム」が関心の焦点となったのは、Jed Esty, *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England* (2003) 以降であったと言えるだろう。Esty はとりわけ T. S. Eliot と Virginia Woolf の後期作品を中心に、盛期モダニズムから後期モダニズムへの転回を、イギリス帝国の衰退から戦後福祉国家の台頭へと至る時代背景に大胆に文脈化した。具体的には、イギリス帝国の「大都市の知覚」にその基盤を置いていた盛期モダニズムが、逆説的にも、イギリス帝国の退潮とナショナル・カルチャーへの回帰に、共同体意識の再生による文学・文化の復興の可能性を見ていた、という議論である。

本研究課題は、Miller と Esty が切り開いた後期モダニズムの問題関心を引き継ぎながらも、特に Esty の議論の枠組みに大きな問題点を見出し、その批判的再検証のために1930年代～50年代のイギリス文学・文化を再解釈するものだった。具体的には、Esty が「退潮」を見たイギリス帝国は、たしかにその最盛期に比べれば、20世紀半ばに大きな衰退を経験したものの、第二次世界大戦以後の冷戦初期もいまだに一定の国際的地位を

維持していたのであり、その史実を踏まえれば、戦後福祉国家期に「ナショナル・カルチャー」への回帰を見出すのはやや単純に過ぎはしないか。また、Esty の研究では十分に触れられていない第二次世界大戦や、冷戦の文脈は、後期モダニズム期の文学・文化を考える上でやはり無視することはできないのではないだろうか。

以上で挙げたような疑問点・着眼点は Marina MacKay, *Modernism and World War II* (2003)、Patrick Deer, *Culture in Camouflage: War, Empire and Modern British Literature* (2009) などの研究においてはすでに表明され、詳しく検討されている。本研究課題はこうした問題意識を受けつつも、1930年代以降のイギリス文学に、のちのポストコロニアリズムの台頭の予兆や、グローバル化の先駆をも見出すために、従来の「後期モダニズム」観を、(1) ナショナル・カルチャーを逸脱する越境的ネットワーク、(2) 急進的政治運動や世界大戦などの政治的危機、(3) 新興マス・メディア、の三つの着眼点から批判的に修正するものとして構想された。

## 2. 研究の目的

本研究は、「1. 研究開始当初の背景」ですすである程度説明したとおり、1990年代末から2000年代初頭にかけて登場した「後期モダニズム」観を批判的に修正することで、従来のイギリス文学史・文化史観を刷新することを目的としていた。

これに付随する目標として挙げられるのは、「モダニズム」概念それ自体の拡張と変容を跡づけることである。このねらいのために、本研究では、Eliot や Woolf といった成典的作家たちの晩年の作品ではなく、(Miller が重視した) Wyndham Lewis、ならびに George Orwell、W. H. Auden、William Plomer など、1930年代に登場した作家たちの作品や、Alfred Hitchcock、David Lean といった映画監督たちの映像作品、Ian Fleming のスパイ小説など、はばひろい研究対象を設定することによって、「後期モダニズム」を狭義の文学のみならず、ひろい意味での「文化史」的な概念として拡張・再定義することが目的だった。

## 3. 研究の方法

このような研究目的のために、本研究は、(1) テキストの精読と歴史主義的研究の両立、(2) 複数の研究対象間の比較対照、(3) アダプテーション研究による文学・映像テキストの横断、という三つの方法を用いた。以下でより詳しく説明する。

- (1) 精読と歴史主義的研究の両立  
「後期帝国主義」ならびに第二次世界大

戦・冷戦の文脈から後期モダニズムを再定義するこの研究で、第一に重視したのは、しばしば相反するものと見なされることがある**(a)テキストの精読と、(b)歴史主義的研究**、という二つのアプローチの両立・統合である。そのため、一つのテキストを研究の中心に据える場合でも、本研究プロジェクトにおいては、その作家がそれ以前・それ以後に執筆したさまざまなテキストを合わせ読み、そうすることで、特定の時代状況に対応する個別・具体的な「変化」が特定のテキストの形式的特徴にいかん表れているのかを、たんに背景研究のみならず、テキストそのものの精読から浮かび上がらせるアプローチを取った。このアプローチは特に、研究業績欄で挙げた雑誌論文において、**George Orwell** の小説 **Nineteen Eighty-Four (1949)** を再解釈するうえで、**Orwell** 自身のユートピア観の変化をあぶり出すことにつながり、大きな成果を挙げることができた。

#### (2) 複数の研究対象間の比較対照

同時に重視したのが、一つの研究対象のみにしぼられず、しばしば複数のテキストや、複数の作家を同一のテーマからインターテキスト的に関連づけ、その比較対照そのものからある時代のひろく共有された問題意識をあぶり出すアプローチを採用した。

例えば雑誌論文においても、**Orwell** の他のユートピア文学への異論（例えば **H. G. Wells**）などが、重要な役割を占めている。また、学会発表ならびに雑誌論文（発表の短縮版）においては、**John Keats** の詩の解釈をめぐる、**Cleanth Brooks, I. A. Richards, T. S. Eliot, Christopher Caudwell** などのさまざまな批評家たちが、1930年代から40年代にかけて論争に関わっていたこと、また、この論争が実は「文学」の政治的役割をめぐるものだったことを論証したが、これもまた比較対照を重視するアプローチの成果である。

#### (3) アダプテーション研究

本研究課題の第三の研究方法が、上の(2)とも関連するアダプテーション研究だった。アダプテーション研究は本来、原作の文学テキストと翻案の映像テキストとの精密な比較研究を基盤とするものであるが、本研究においては特にこの手法を、アダプテーションのプロセスそれ自体が、時代特有の問題意識を巻き込み、作品そのものと時代状況との緊密な相互関係を構築するさまをあぶり出すために用いた。

雑誌論文（学会発表の論文版）では、**David Lean** による約100年前の **Charles Dickens** 小説の翻案が、第二次世界大戦後のイギリス福祉国家成立時の問題式を反映すること、学会発表では、**Alfred Hitchcock** の **Somerset Maugham** 短編集の翻案が、1930年代当時の反戦意識をひそかに共有す

ることをそれぞれ論証したが、このような成果は、アダプテーション研究を歴史主義的に拡張するアプローチによって可能になったものである。

## 4. 研究成果

上述した研究アプローチによる研究成果は、おもに以下の三つに分類できる。

#### (1) ユートピア主義の歴史的再考

口頭発表・雑誌論文を経て、雑誌論文に結びついた研究では、**George Orwell** の **Nineteen Eighty-Four** を主要テキストとして、後期モダニズムならびにユートピア主義の再定義を行った。

上述したように、後期モダニズムはしばしばナショナル・カルチャーへの回帰という観点から捉えられることが多いが、**Orwell** の場合に顕著なのは、第二次世界大戦後になっても、なおイギリス帝国と冷戦という国際的文脈で、ユートピアの可能性を模索する問題意識だった。また、圧倒的に「ディストピア」として読まれることの多いこのテキストのなかに、現実を批判する可能性としての「ユートピア」を見出した。

なお、この論考はアメリカの **Modernist Studies Association** の学術誌（ウェブ版）**Modernism/modernity Print Plus** で刊行されたものであり、一定の国際的インパクトを想定しうる成果である。

#### (2) 福祉国家と自由主義の問題

口頭発表を経て雑誌論文に結びついた研究では、**David Lean** 監督の映画版 **Oliver Twist (1948)** が、**Charles Dickens** の原作 **Oliver Twist (1838)** を翻案するにあたって、児童虐待と保護の問題を前景化したこと、それと同時に、原作の内包した反ユダヤ主義を無批判に反復することで、第二次世界大戦後のイギリスにおける外国人排斥のムードを共有してしまったことを論証した。このケース・スタディは、「ナショナル・カルチャー」への回帰の試み自体が、当時の国際的文脈ではらむ問題を指摘したものであり、「後期モダニズム」概念自体のグローバルな再考に大きく貢献している。

また、学会発表ならびに雑誌論文（発表の短縮版）では、1930年代の良心的リベリズムの問題関心が、戦後アメリカにおける新批評(**New Criticism**)の出発点においていかに脱色されたのかを跡づけ、第二次世界大戦が1930年代の文化的・政治的問題の「解決」ではなく、その抑圧・忘却でしかなかったのかを考察した。

こうした観点から、「後期モダニズム」がナショナルな枠組みでは一定の社会的成果を挙げた時代を反映しつつも、積み残された問題をテキスト自体に刻印するさまをあきらかにすることができた。

### (3) スパイ小説と映画の研究

第三の成果として数えられるのが、1930年代から50年代におけるスパイ物語の研究である。伝統的な「スリラー」小説は、特に1930年代以降、ミドルブラ的読者層に訴えかける娯楽小説の一分野として、特にイギリスにおいては急成長を果たしたが、この分野がモダニズム研究との関係で注目されることは必ずしも多くはなかった。

この状況を踏まえると、1930年代のHitchcockの映画に込められた反戦思想を考察した学会発表、ならびに、1950年代以降の長いシリーズとなったIan Flemingの小説におけるスパイ小説の伝統の改変を考察した雑誌論文は、ポピュラー・カルチャー研究ないし、ミドルブラウ研究の観点から「モダニズム」研究を補足するものとして、一定の価値を有するだろう。これらの研究がまた、文学と映画の垣根を越えるものであることも付言しておきたい。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

秦邦生、「ジェイムズ・ボンドはミドルブラウ文化の夢を見るか?」イアン・フレミング『カジノ・ロワイヤル』と批評の課題の棚卸し」中央大学人文科学研究編『英国ミドルブラウ文化研究の挑戦』(中央大学出版局、2018年)、査読無、pp. 365-98.

秦邦生、「福祉国家のためのディケンズ?

イギリス「文芸映画」とアダプテーションの歴史性」小川公代ほか編『文学とアダプテーション ヨーロッパの文化的変容』(春風社、2017年)、査読無、pp. 113-139.

**Kunio Shin, "The Uncanny Golden Country: Late-Modernist Utopia in Nineteen Eighty-Four", *Modernism/modernity Print Plus*, 査読有、June 2017, volume 2 cycle 2.  
<https://doi.org/10.26597/mod.0007>**

秦邦生、「レイト・モダニズムとリベラリズムの奇妙な死」『第87回大会 Proceedings』(日本英文学会)、査読無、pp. 59-60.

秦邦生、「黄金郷の向こう側」『1984年』におけるディストピア空間のスタイル」『第87回大会 Proceedings』(日本英文学会)、査読無、pp. 147-48.

[学会発表](計5件)

秦邦生、「反戦的ヒッチコック 『間諜最後の日』(1936年)におけるアダプテーション、検閲、殺人の倫理」青山学院大学英米文学会(招待講演)、2017年12月16日

秦邦生、「デイヴィッド・リーン『オリバー・ツイスト』におけるアダプテーション、福祉国家、人種表象、そして暴力の問題」『英文学と映画』研究会(法政大学)、2017年3月4日

秦邦生、「レイト・モダニズムとリベラリズムの奇妙な死」日本英文学会第87回全国大会(於立正大学)、2015年5月23日

**Kunio Shin, "The Late-Modernist Mishmash: Transnational Intertextuality and Hybridization in Wyndham Lewis and William Plomer," *British Association for Modernist Studies*, 2014 June 27.**

秦邦生、「黄金郷」の向こう側 『1984年』におけるディストピア空間のスタイル」日本英文学会関東支部、2014年6月21日

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

[その他]

ホームページ等なし

### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

秦 邦生 (SHIN, Kunio)  
青山学院大学・文学部英米文学科・准教授  
研究者番号: 00459306